

# お彼岸です。

## 春彼岸

彼岸(ひがし)とは極楽浄土のこと、私たちが生きているこの世のことは此岸(しがらみ)といひます。

春分の日、昼と夜の長さが同じになり、太陽は極楽浄土があるとされる真西に沈むため、この日に彼岸にいる先祖を供養し、同時に自分も彼岸にいけるように祈る習わしが生まれました。

## 「中道」

彼岸が行われる理由の一つに、「中道」という仏教の教えがあります。中道とは、右でも左でもない、どちらにも片寄らない心のことを言います。人は時おり、片寄った考え方をしています。「あの人は好きだけど、この人は苦手」「私は正しいが、君は間違っている」という考え方は、これでは争い事が起こってしまいます。そんな時こそ、片寄らない心「中道」が大切なのです。

お仏壇とお墓に手をあわせましょう。

## 彼岸きて 悲願続けて また彼岸

これは、ある事件で、息子さんを亡くされた母親が詠まれた俳句です。残念ながら犯人は時効になり、罪を償うことはありませんでした。犯人が早く見つかって欲しいという母親の「悲願」は、やがて息子に恥ずかしくない生き方をしたい「悲願」に変わり、ついには、冬が春になるように、憎しみもなく心清らかに生きたい「悲願」に変わったと言われます。

悲しみ、苦しみ、悩みのない世界こそ「彼岸」です。これは何もご先祖様や、お亡くなりになった方だけが行く場所ではありません。生きている私達は何事にも片寄らない心であれば、その場が彼岸となり、毎日が彼岸となるのです。もちろん、仏壇やお墓を掃除する事も大切です。春の暖かい木漏れ日のような「片寄らない心」で日々生活する事が、本来の彼岸供養なのです。

「広島県弘宗寺住職 水野宏泰様 一部文章掲載」

## お墓参りとお掃除

お墓参りとは「お墓掃除」といっても過言ではありません。家の掃除をするように、先祖のお墓もきれいにしたいものです。

寺院墓地の場合は本堂のご本尊に手を合せて、ご自身のお墓にお参りしましょう。二十年から三十年前までの墓石は磨きが入っていて、比較的ツヤがあります。その場合はスポンジやタオルを絞って墓石全体を拭いてあげると、ある程度きれいになります。

墓石のつなぎ目の隅に黒く付着している汚れは水垢なので、かなり頑固です。専用の水垢とりでこするときれいになります。

花筒はステンレス製がほとんどですが、あまり長く置くと、水が腐って腐臭がします。少しでも長持ちさせる為には、十円玉を一枚花筒の中に入れておく

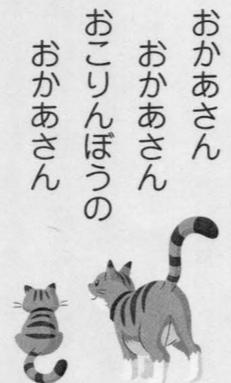


と、銅イオンの作用で効果があると思えます。それ以前のザラツとした墓石は、中まで汚れが染み入っているので、たわしでゴシゴシ洗うしかありません。お酢を三倍くらいに薄めて墓石全体を濡らし、暫くしてから、たわしでこするとお酢の漂白作用でいくらかきれいになると思えます。水洗いは、しっかりと行ってください。(磨いてある墓石は、あまりお勧めしません。)

お供えはお参りされた後、お下がりととなります。お持ち帰りになって「直会」として、皆さんで頂いてください。お酒やビールも、「ご先祖は頭から飲まれません」、墓石に掛けないで廻りにまくか、持ち帰ってください。変色の原因になります。



## おこりんぼうの おかあさん



おかあさん おかあさん おこりんぼうの おかあさん いつも いつも わたしには すごくいごえでもね とちゅうで でんわがくると いごえがかわっちゃうの でもね また でんわをきると いつものいごえにもどっちゃう わたしにも おでんわのいごえで はなしてね おかあさん

東京子ども教育センター教室 発行



## 仏陀の言葉

尽くしてくれる友人、 楽な時もつらい時も 変わらず友でいてくれる友人、 ためになることを 言ってくれる友人、 思いを共有してくれる友人、 友人とはこの四種であると 賢者は知り、 まごころをこめて 彼らに尽くすべきである。

## 暮しの中の仏教の言葉

### ●有頂天

仏教では迷いの世界を六つにわけて六道と呼び、一番高い所が「天」の世界。その天で最高の境地を非想非非想処天といひ、有(形ある世界)の頂点だから「有頂天」。まだ悟りの世界ではないから、すべり落ちないように。

### ●看病

病人を看護することを看病というが、「大言海」は看病の意味として「僧侶の説法・呪法などして病者を癒すこと」を挙げ、「梵網経」には「看護福田は第一の福田なり」(看病が仏教の重要な行ない)と説いている。

## 田中家通信編集部より

先日の震災は、未曾有の大きさ、そして災害をもたらしました。私たちが今、何ができるかを冷静に考えなければなりません。そんな中で、中国をはじめ諸外国が、日本人のマナーや礼儀、冷静さを絶賛しています。この記事は日経のコラムに書かれていた内容ですが、大変感銘を受けました。

初めの激震の緊張がほどけてきた後にもっと不安が襲ってくるかもしれない。自分の家族や恋人、友達を心配する気持ちが、いつの間にか他者への不信や批判に化けるかもしれない。

ここで負けてはいけない。心を強く持とう。

●被害状況が刻々明らかになる。死傷者の数が増え続けている。通じない電話。濁流に消えた町。

失ったものは大きい。けれども目に入る光景だけが災害の姿ではない。忍び寄るもう一つの影に気がつけてほしい。

## 困難に立ち向かう勇氣

人への思いやり。そんな人間の力にあらがう恐怖心や猜疑心など負の感情だ。

●くじけそうになっても忘れてはならないことがある。

私たちは、ひとりぼっちではない。福島原発の被害を食い止めようと挑む消防隊員がいる。韓国や米国など各国からも、応援が続々と到着し始めている。その働くすべての人々に、家族があり、友人がいる。強者が弱者を助けるのではない。私たちは、助け合う。

●なぜ自分の町が。なぜ自分の家族が。想像を超えた事態にぶつかったとき、頭に浮かぶのは「なぜ」の二文字だろう。

被災者の怒りや疑念は当然だが、答えが出ない「なぜ」もあるのがつらい。

いまは人と人とのつながりを信じ、自分には何ができるかを考えたい。

この困難を乗り切るには一人ひとりの力が要る。

「日本経済新聞 春秋より掲載」